獲得可能性が妬み感情に及ぼす影響

○井上裕珠・村田光二（一橋大学大学院社会学研究科）

キーワード: 妬み感情, 獲得可能性, 自己評価

The effect of attainability on envy

Yumi INOUE and Koji MURATA (Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University)

Key words: envy, attainability, self-evaluation

目 的

妬み感情とは、能力や業績、所有物において他者が自分よりも優位な立場にあるときに経験される不快な感情であるとされている(澤田・新井, 2002; Parrott & Smith, 1993)。しかし、私たちは優越した他者に対して常に妬みを感じるわけではない。実際、自分よりも勉強のできる友人を見たときに、自分も頑張ればできると感じれば、妬みを感じずに羨望を感じることもあるだろう。つまり、妬み感情を感じる程度は、他者の優れた性質を自分も獲得できると感じるかどうか依存することが想定される。本研究では、他者の優れた性質(能力や業績、所有物)を自身が獲得できる可能性を指す用語として獲得可能性(attainability; Lockwood & Kunda, 1997)に注目し、獲得可能性が妬み感情の生起に及ぼす影響を実証的に検討した。

Lockwood & Kunda (1997)は、他者の成功の獲得可能性が自己評価に及ぼす影響について実証的に検討し、他者の優れた性質の獲得可能性が高いときには、低いときほどには自己評価が低下しないことを示した。他者が自分よりも優位な立場でも、それが自己評価を低下させない場合には妬み感情が生じにくい(Tesser, 1991)ことを踏まえると、成功した優れた他者を見たときに、その成功を自分が獲得できると感じれば、自己評価が低下しないため、妬み感情が生じないだろうと考えられる。他方で、獲得することが難しいと感じれば、優れた他者の存在によって自己評価が低下するため、妬み感情が生じるだろうと予測できる。本研究ではこの予測を実証的に検討した。

方 法

参加者: 東京大学の男子学生 44 名(平均年齢 18.8 歳)で、獲得可能制低条件または高条件にランダムに割り当てられた。

手続き: 各セッションは、実験参加者と実験協力者の 2 名から構成されていた。参加者は“課題遂行能力と個人特性・課題遂行環境との関連性”についての研究に参加することを説明され、ER 指数を測る課題の説明を受けた。“ER 指数とは多くの情報の中から、より速くそして正確に必要な情報を選択できる能力を数値化したもので、将来の年収や社会的地位に大きく関連する”ということが伝えられた。その後参加者と協力者はパソコン上で 20 問の課題を解いた。解答終了後、別室で印刷された結果用紙が参加者と実験協力者にフィードバックされた。この用紙はあらかじめ用意されていたものであり、実際の成績に関わらず実験参加者はごく普通の能力であることが紙面上で伝えられた。その後、実験者から課題成績が発表され、実験参加者には“隣に座る協力者が一番良い評価である”ことが知らされた。そして、ER 指数が今後伸びるかどうかについての説明によって条件操作がなされ、続いて参加者と協力者はパソコン上で従属変数をはじめとする質問に回答した。その後、参加者に実験終了を告げた。その後、参加者の疑念チェックを行い、丁寧にディブリーフィングを実施した。

独立変数操作: “ER 指数”が今後伸びるか否かの説明によって条件操作を行った。獲得可能性高条件の参加者には“情報選択能力が大学生において高まることが研究から明らかにな

っており、ER 指数を高めるためのトレーニングを数ヶ月にわたり行った大学生の 88%以上で ER 指数の高まりが見られた”という教示をした。他方、獲得可能性低条件の参加者には、“情報選択能力が大学生においては今後ほぼ変化しないことが研究から明らかになっており、ER 指数を高めるためのトレーニングを数ヶ月にわたり行った大学生の 0.2%しか ER 指数の高まりが見られなかった”という教示を行った。**従属変数:** もう一人の参加者に対する妬み感情 3 項目(ねたむ、嫉妬する、ずるいと思う)を 9 件法で測定した。

結 果

実験中の教示を誤解した者 1 名と実験の意図に気付いた 4 名を合わせた 5 名を除外した 39 名を分析対象とした。

獲得可能性の操作チェック: 獲得可能性を測定する 4 項目(e.g., ER 指数はこれから伸びる)の内的整合性が確認されたため($\alpha = .94$)、これらの合算平均値を獲得可能性指標とした。この指標について条件間の差を検討したところ、獲得可能性低条件($M=4.58$)よりも高条件($M=6.70$)の参加者の方が、ER 指数を伸ばすことができると高く回答しており、条件操作は成功したと考えられた($t(32)=4.21, p<.001$)。

仮説の検討 もう一人の参加者への妬み感情を測定する 3 項目の合算指標を妬み指標とした($\alpha = .70$)。この指標に条件間で違いがあるかどうかを検討したところ、獲得可能性低条件の参加者の妬み得点($M=4.19, SD=1.50$)の方が、高条件の参加者の得点($M=3.66, SD=1.37$)よりも有意に高いことが示され、仮説を支持する結果であった($t(37)=2.41, p<.05$)。

考 察

獲得可能性が低いときには、高いときよりも相手に対する妬み感情が高まることが示され、仮説が支持された。妬み感情研究においてあまり実施されてこなかった実験室実験によって、このような結果を得た点に意義があるだろう。

本研究では、獲得可能性が低いときには自己評価の低下が生じ、それに伴って妬み感情が生起することを実証的に示したが、自己評価については直接的な検討を行っていない。これは、自己評価が自己報告によって必ずしも反映されないことが想定されているためである(Tesser, 1991)。しかしながら、いくつかの研究では自己評価を測定しており、例えば Lockwood & Kunda (1997)は比較領域に関わる形容詞を用いて自己評価を測定している。今後の研究では自己評価を測定し、本研究で想定している心理過程をより詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

- ◆ Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997). Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. JPSP, 73, 91-103.
- ◆ 澤田匡人・新井邦二郎(2002).妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, 50, 246-256.
- ◆ Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the experiences of envy and jealousy. JPSP, 64, 906-920.
- ◆ Tesser, A. (1991). Emotion in social comparison and reflection processes. In J. M. Suls & T. A. Wills (Eds.), Social comparison: Contemporary theory and research (pp. 115-145).